

言語の生得性と後天的要素の境界

田 林 洋 一

1. 序

本稿では、言語の生得性を重視する立場、即ち、言語は人間の本能であり、生まれながらに備わっているとする主張と、言語の後天的要素を重視する立場、即ち、言語はヒトが生まれてからの後天的刺激によって備わるとする理論を展開するアプローチとの境界について若干の考察を加えることを目的とする。

言語を生得的なものとする立場は、チョムスキーやピンカー（Pinker（1994）他を参照）らに代表される生成文法（generative grammar）論者が主な論客であるのに対し、言語は後天的な刺激によるものだとする立場は、サピア（Sapir（1921））や認知言語学論者が主な主張者である。本稿では、そのどちらにも肩入れすることは基本的にせず、言わば折衷主義的な立場を維持する。

2. 言語学と言語論

言語学は、そのアプローチの仕方から、自然主義的な自然科学の学問として見なす立場と、哲学的・文献学的な考察を主眼とする、人文科学の学問として見なす立場におおまかに2分される。前者は言語の生得性を主張することが多く、後者は言語の後天性に立脚した理論を展開することが多い。この区別は、そのまま「自然科学としての言語学」（ないしは認知科学（cognitive science）に裏打ちされた言語学）と、「人文科学としての言語論」との対立に収斂される。以下、「（自然科学としての）言語学」と「言語論」の対立について、「語学」と「言語学」の差異から検討する。

2.1 言語学と語学の対立

「語学」（あるいは「外国語学」）を学ぶ点において、その本質はある未知の言語を習得し、使いこなすという、いわゆる「読み・書き・聞き・話す」の4つの言語能力を習得することが目的の1つになっていることは間違いない。先の大戦後、外国語学習に関する考え方が大きく変わり、「使える外国語」を習得するというテーゼが唱えられて久しい。そしてこれに応えるように次々と新しい教授法がパソコンやインターネットの普及とともに紹介され、「アクティブ・ラーニング」（active learning）や「E-ラーニング」（e-learning）の名の下に外国語が教授されている。しかし、日本で「使える外国語」と言う時、なぜか狭義の「会話力」に限定されがちである。会話には文法は無用、文法にこだわっているから日本人は外国語が使えないのだという発言があちこちで喧伝され、文法は忌み嫌われるべきものとして扱われている。だが、「会話」に力を入れ始めてから相当な年月が経っているにもかかわらず、日本人の会話力が飛躍的に上達したかという点、答えは多分に怪しい。

文法とは中世に「発明」されたものであることを考えると、文法軽視はあながち誤りではないのかもしれない。だが、人文学者でサラマンカ大学のラテン語教授だったフランシスコ・サンチェス・デ・ラス・ブロサス（Francisco Sánchez de las Brozas）は、その著書 *Minerva* と題するラテン語教則本の中で、「おしなべてラテン語に堪能になった人は、（中略）話すことによって上達したのではなく、考えたり、模倣したりしながら、書くことによって上達した」と述べている。ブロサスの時代（16世紀）は授業が全てラテン語で行われていたため、ラテン語が話せないと困ることは承知の上で、ブロサスははやる気持ちを抑えて、周辺的な努力を怠るなと戒めているのである。従って、「使える外国語」とは会話能力だけに限定されない、広義の4能力を指していると言ってもいいであろう。

さて、「言語」とは何か、という根本的な問いに対して、現代言語学がそれに回答を与えることは不可能である。つまり、「言語」そのものの定義が言語学では曖昧で、方言やピジン語（pidgin）、クレオール語（creole）などが言語

の「亜種」なのか、それともまた別の言語体系を有しているかといった問題に、現代言語学は明確な答えを提供することができない。本稿では「言語」そのものの定義に触れることはないし、また、それは議論の対象上、必要がない。さしあたって我々は、「語学」とは、「自分にとって未知の、あるいは理解不能の言語を学ぶ」という仮定に基づいて、半ば達観しながら言語研究や語学習得に接することになる。

そうすると、「語学」と「言語学」の根本的差異は以下ようになる。即ち、ある外国語を母語以外の言語として学ぼうとする姿勢が「語学」であり、「言語学」は言語の本質を突き止め、追求していくという学問姿勢である。「語学」の「学」は習うものであり、「言語学」の「学」は研究するものであるということが、それぞれ言える。勿論、習う過程で研究することはいくらでもあるかもしれないが、それでも「語学」と「言語学」を同列に扱うには無理がある。「言語学」はその対象と研究姿勢が学問的領域に入っている以上、明確な「終了」がない。しかし、「語学」は、当該言語さえ何らかの形でマスターしてしまえば、そこでとりあえず「語学」は終了となる。

「言語学」と「語学」の差異が以上であると仮定するならば、言語学や語学に接する人々は、①語学にも言語学にも精通している人、②語学には精通しているが、言語学の知識がない人、③言語学の知識を有してはいるが、語学が苦手な人、④語学も言語学の知識もない人、の4つに分類できる。以下、それぞれの特徴を見てみよう。

言語に接する上で、一番理想的で優秀な人が①のパターンに属することは論を待たないであろう。言語学を研究するにあたっては、当該研究言語の内省が必要不可欠である。その内省を自分で行うことができ、そしてかつ言語の分析能力を持っているということは、言語学を研究する上でも最も大きなアドバンテージを持っていると同時に、語学（しかも、全く知らない未知の言語であっても）を習得する上でも非常に助けになる。

2番目のパターンについては、職業通訳者、翻訳者、バイリンガル (bilingual) やポリグロット (polyglot) と呼ばれる多言語話者などが当てはまる。勿論、

言語を介する職業に就いていなくとも、現在の日本の教育では、高校までは外国語としてほとんどの場合に英語を、大学に入ると第二外国語として英語以外の言語を学ぶことが通例となっている。そうした人々にとっては、英語や第二外国語として選択した言語の運用能力が限られたものであるとは言え、多かれ少なかれ「語学（英語、ドイツ語など）ができる」と見なされる。言わば「語学のプロ」である彼らに対しては、基本的に言語学の知識は絶対的に必要なものではない。言語を分析・研究する必要がなくとも、翻訳や通訳ができなくなるわけではないからである。だが、それでも①のパターンの人々と比べると、新たに別の言語を語学として習得しようとする場合や、当該言語に対する深遠な理解が必要とされる場合に、多分なりとも不利な立場に追い込まれることになるのは否めない。

モンゴメリの作品の『赤毛のアン』の翻訳に従事した村岡花子も、②のパターンに入る職業翻訳者であっただろう。例えば、以下のような翻訳が村岡の作品には散見される。

ジム船長はアンのための椅子をすえたが、まずその前に椅子から大きな、みかん色の猫と新聞をどけた。「メーティ、おりなさい。お前の場所は長椅子だよ」

モンゴメリ著、村岡花子訳『アンと夢の家』p.93. 新潮文庫

私たちは上記の文を理解する時、「みかん色の猫」とは何かを考える必要がある。原文での該当箇所は orange cat となっているのだが、村岡は orange をそのまま「みかん」と訳しているのである。「みかん色の猫」を想像することは、私たち日本人にとっては非常に難しいであろう。実際は、英語の orange が指し示す色の範囲は日本人にとっての「茶色」にまで侵食しているのに対し、日本語の「みかん色」はオレンジ色の範囲しか指し示さないという食い違いから来ている（なお、この指摘は鈴木（1990：8-17）にも現れている）。この訳し方の語弊は、畢竟、村岡が的確に orange という語を訳せなかった、

即ち、英語学（つまり言語学の一部）の知識の不足が原因である（だが、村岡が翻訳に従事した時期を考えると、日本ではそこまで英語学が発達していなかったという点で、無理はないものと思われる）。

③のパターンは一見奇異に映るかもしれないが、ある言語を読み書き、話し聞くという能力がないにもかかわらず、当該言語の分析能力をもつ人々を指す。例えば、ドイツ語を理解しないドイツ語学者がいる、ということである。一見内的矛盾を孕んでいるようなこうした人々は、決して稀ではない。例えば、ある程度スペイン語ができる日本人は、イタリア語やポルトガル語の知識を少しではあるが備えていることが多い（これは、ある言語が他の言語と似ているか、そうでないかという点から来ている）。つまり、スペイン語研究者の中には、イタリア語やポルトガル語ができなくとも、それらの言語を分析する力を持っている人がままいるということである。

私たちは「ある外国語を使える」と言う時、その運用能力が決してネイティブレベルであることを意味しない。また、仮にある言語のネイティブであったとしても、その言語を何の間違いもなく、使用できるという絶対的な保証はない。日本人が日本語を話す時、往々にして敬語の使用を誤ったり、フィンランド人がフィンランド語の最上級対格の屈折を間違ったりすることがあるのが、その証左と言えよう。また、著名な言語学者が、言語の運用能力において、ネイティブの子供から教わることが多いのも、またよく生じる事態である。

③のパターンの言語学者は、1950年代から増えてきたように思われる。それまでの言語学界は比較言語学（comparative linguistics）や歴史言語学（historical linguistics）が優勢であったため、いくつもの言語を習得しなければ言語研究はできないという状況が生まれやすかった（だが、彼らが完璧に外国語を操っていたかという点、勿論そんなことはない）。しかし、ソシユールの登場により、言語の共時的状態、即ち瞬間的な現在の言語現象の解明に力が注がれるようになると、比較・歴史言語学は次第に衰えを見せ、ある言語を集中的に分析しようとする機運が高まっていく。つまり、言語の内在的

な姿勢を重視し、他の言語との歴史的関連や歴史的視点を取りあえず等閑視する方法論が打ち出されたのである。チョムスキーも、ヘブライ語に関する論文で学位を授与されているが、その後、専ら自分の母語である英語の研究に勤しみ、ヘブライ語に関する研究を放棄しているように管見では思われる。

最後の、④のパターンの人々は、一見言語や語学といった仕事や営みとは切り離された存在に見えるかもしれない。しかし、言語が思考に影響を与えるという「サピア・ウォーフの仮説」(Sapir-Whorf hypothesis) が正しいとするならば、彼らは母語によって思考に影響を与えられていることになる。言語が文化の一部を形成していることは紛れもない事実である以上、社会的な活動に参加するためには母語を含めた言語に接することを要請され、逆に言うと言語に接しない活動は社会的に抹殺されることになる。また、作家や小説家などは、母語以外の外国語の運用能力がなく、また、言語学的な言語分析能力が欠如していたとしても、言わば言語を用いて身を立てている。作家にとっては用いる言語の詩的機能 (poetic function)、即ち言語に対するエレガントな使用が重視されるが、その分析方法や研究方法は本質的に必要な能力ではない。その意味では、(失語症などの人々を除くと) 言語活動に従事しない人間はいないと言っても言い過ぎではないであろう。

2.2 言語学と言語論の対立

「言語学」と「言語論」は、上述の「語学」と(広義の)「言語学」の対立に比べると、遥かに複雑である。両者は包含されて、広義の「言語学」という括りに縛られることが多いからである。しかし、両者は峻別しなければならない対象であると同時に、言語を体系的に捉え、分析していくというアプローチについては共通している。問題は、そのアプローチの方法である。

言語とは目に見えない対象であり、実体を持たず、客観的に概観できない以上、言語に定義を与えることはできないことは前述した。しかし、それに対して可能な限り「科学的に」アプローチしていく姿勢が「言語学における科学性」と言うことができる。従って、言語学の科学性が目指す指針は言わ

ば努力目標であり、言語学が物理学や数学がそうであるように厳密に客観的な姿勢を保って科学的に検証していくことは不可能であるということになる。

「科学」においては、「全てを当然のこととして受け止めること」や「暗黙の了解」などは極力排除せねばならない研究姿勢であることに異論はないであろう。それと同時に、「科学の基本的な姿勢」は、根拠のない、事実や真理に基づかないものは受け付けない。思いつきのままに何を提案してもいいという姿勢は科学を破綻させるという意味で、科学とは極めて保守的である。

言語とは我々が無意識に使用しているものであって、その実体は内観することしかできない。よって、「暗黙の了解」で、ある言語現象を肯定（ないしは否定）するのではなく、様々な他の言語現象や言語状況に照らし合わせて、「それが正しそうだ（ないしは間違っていそうだ）」ということを明示的にする必要がある。そうして得られた仮定をとりあえず前提として、幾多の言語現象や諸理論を検証し、反証していくという過程を経ることが言語研究の科学的側面を打ち出すアプローチである。従って、仮にありそうにない仮定が打ち出されたとしても、それが反証され、新たな事実や仮説が誕生するまでは、それを「当面の事実」として受け入れていく姿勢が要求される。しかし、言語の科学性については非常に議論がなされており、様々な考え方があって一定していない。

さて、言語に対する科学性が議論の対象となっているという事実こそが、言語学が純然たる自然科学としての科学性を備えていないことの証左になっていると思われる。その証拠に、物理学や化学では、科学性の議論はほとんど俎上に上がることはない。即ち、現段階で「言語とは何か」という根本的な問いに回答が不可能である以上、それぞれ別個人の視点から言語を見定めていくことが必要になるし、またそうしなければ言語に対するアプローチも不可能となる。むしろ、個人的な視座を持って言語と接せざるを得ない、と言った方が的を射ていると思われる。現代言語学の父と呼ばれるソシュールの理論、構造主義に終止符を打ったチョムスキーの理論、チョムスキーの生成文法に反旗を翻した認知言語学的視点といった、様々な視点やアプローチ

が重層的に重なり合って、言語に対する研究（言語学）が進められていると言ってもいいであろう。勿論、それに対する批判や反証、修正理論の提示などもまた個人的な産物である（チョムスキーの提唱した生成文法理論のように、提唱者と修正者が同じということも多々ある）。世界の言語学者が独自の視点から言語現象を検証して研究しているという性質上、言語理論は厳密には一個人の主張の域を出ることはない。

言語学に関する限り、いかなる視点があるのか、ないしはいかなる視点が可能なのかというアプローチに関する方法論から研究がスタートしていると言ってもよい。そして、言語学という学問分野は、そうした方法論を混濁させ、複数の視点を持つことをひどく嫌う風潮がある。個人の言語理論は、そうした複数の言語理論を検討して新たに生み出していくものが大半になる。ミッシェル・アリベ (Michel Arrivé) は、1979年に発表した論文“L'épouvantail du structuralisme: Hjelmslev aujourd'hui”の中で、この点を以下のように指摘している。

おそらくほかの諸科学以上に、言語学は固有名詞を経由するという傾向がある。ソシュール、ヤーコブソン、イェルムスレウ、ハリス、チョムスキー、ほかにはいくつもない。だが、これらの固有名詞によって包摂されているものは、ほとんどの場合に人為的なものである。

つまり、言語論というのは、言語という客観的・実在的な対象に対する考察というよりも、言語に関する個々のディスクールの集合としてしか存在しない、ということである。言語論は、この点で哲学や文学と変わらない（立川・山田（1990：5）他を参照）。言語学の科学性を備えた、自然科学としての言語学は言語論の前では真っ向から否定されてしまうのである。

言語学というのは、その研究の対象である目に見えない「言語」の性質上、言語に対する諸々の理論の寄せ集め、あるいは集合体にしかなりえないということである。各研究者が言語に対してそれぞれの派閥を持っていると解釈

できなくもない。そして、どの派閥にも言語を解明するに当たって決定的な理論は存在しないため、言語研究を志そうとする者は、自分自身に最も適合した「派閥」を選択することを要求されることになる。広い意味での言語学は、極めて流動的かつフレキシブル、ある意味では独り善がりになる危険性を孕んだ学問でもある。

自然科学でも言語学と同様に、所謂「個人の立ち位置」は重要であるとの指摘もある。

科学は非常に客観的な営みのように見えますが、非常に個人的な営みなんです。自分が何を知りたくて、どう解明していくかは非常に個人的なものだと、科学をやればやるほど感じます。

それは文学とか、芸術とか、哲学とか、そういうことにも通じているでしょうか。つまり、この世界の在り方とか、自然の仕組みとか、生命の振る舞いを捉えたいと、みんな思っている。それをどういう方法で描くかというのは、それぞれの画家に任されているのと同じように、それぞれの科学者に任されているわけです。

福岡（2012：191）

他の諸科学（自然科学・人文科学を問わず）の中でもとりわけ、言語学は「個人的」な側面が強い学問と言える。狭義の言語論は、数学や物理学がそうであるように、客観的かつ第三者からの厳密な分析が可能な学問ではない。むしろ、哲学や文学のように私的理論が展開されていくことになる。従って、広義の「言語学」を語る前に、まず狭義の「言語論」が語られなければならない。

西洋の科学の常識的な世界観はデカルト的であり、科学は（言語学を含めた）人文学も含めてデカルト的な認識で進展してきたと言える。

古来、西洋の科学はものを客観的に見ることを金科玉条としてきた。「理

論」(theory)の語の語源はギリシャ語の「見ること」theoriaである。西洋では、見ることがそのまま捉えること、理解することを意味する。そしてこれが、単に客観的観察を本領とする自然科学だけでなく、哲学をも含めた学一般の基本姿勢なのである。

木村 (1982 : 6)

しかし、これまでの科学は主観性と客観性を混同しており、一見客観的に捉えられた事象も、実は主観的なものの見方から捉えたものであることが多かった(太陽を指して「日は昇る」と主張するのは、客観的事実のように見えて、実は主観的な認知主体の視点から捉えた現象の例であろう)。しかし、20世紀を迎えて、言語学は主観的な側面、即ち個人的な言語論を積極的に取り入れるようになる。

それでは、「自然科学としての言語学」(本稿の議論では「狭義の言語学」)を標榜している立場、特に生成文法理論は言語学に対するアプローチをどのように捉えているのであろうか。

まず誤解してはならないのは、言語学を自然科学的に分析しようとしたのは、チョムスキーがその嚆矢というわけではなく、19世紀のフリードリヒ・シュレーゲルが体系立てた「比較文法」(comparative grammar)からである。比較文法は、言語を自然に支配されている動物や植物になぞらえて、その変化を自然科学的に考察しようとする姿勢を堅持した。アウグスト・シュライヒャーも、1863年にワイマールで出版した「ダーウィンの理論と言語学」(“Die Dawinsche Theorie und die Sprachwissenschaft”)の中で、「言語は自然の有機体である。人間の意志によって規定されることもなく生じ、一定の法則にしたがって成長し発展したが、また老いて死んでいく。言語にもまた、ふつう生命の名で理解されているあの一連の現象がある。だから言語学は自然科学である。その方法は大体のところその他の自然科学の方法とかわらない」と述べている(7ページ以下)。その後、ソシュールを経て、生成文法理論が産声を上げるまでに長い年月を要しているが、言語学を自然科学とみなすのは、

決して新しい視点ではない。

チョムスキーは「重要なのは文法という概念であり、これが根本的なものであるであって、言語というのは副次現象に過ぎない。文法よりも言語の方がより抽象的な概念である」と主張して、言語学界を揺るがしたことがある（Chomsky (1980), Chomsky (1982:237) 他を参照）。チョムスキーが主張するところでは、文法というのは実際に存在しなくてはならず、脳の中に文法に対応する何かなくてはならない。これに対して、言語に対応するようなものは、実在の世界には何もなく、言語という概念にははっきりした意味などない、ということになる。チョムスキーはこの論を更に発展させて、言語学は心理学の下位分野をなしており（なぜなら、言語は脳内で産出されるものであるから）、更には生物学の下位分野であると標榜するに至る。言語学者が人文科学としての学者（scholar）であることを止め、自然科学者（scientist）になるべきだというのである。

また、「自然科学としての言語学」は、言語には規則性があり、それが自然科学という法則と同等のものであるというテーゼを打ち立てている。自然科学という法則とは、言語学においては「文法」とほぼ同義である。「文法」という用語は何通りかの対象を指すために使用されることに留意しなければならない。英語や日本語などの個別の言語の、文の構造的な規則の集合を指して「文法」と呼ぶこともある。一方、辞書と構造規則の総体を文法と呼ぶこともあれば、個別言語を超越した、言語を習得するために必要な言語機能（language faculty）としての「文法」も存在する（これは「普遍文法」（universal grammar）と呼ばれることもある。松本他（1997）を参照）。

文法に対する捉え方は、それこそ言語に対する姿勢の違いであり、正しいかそうでないかを裁定することはできない。だが、広義の言語学には二面性があり、1つは自然科学を標榜する（狭義の）言語学、もう1つは個人の理論に立脚された言語論、という立場があると主張しても言い過ぎではないであろう。

3. 生成文法への疑問

本節では自然科学としての言語学を標榜する生成文法に対して、若干の批判的考察を加える。

3.1 文法の自律性に対する疑問

17世紀のフランスで、思弁文法の理想の復活として提唱されたポール・ロワイヤル（Port Royal）文法をヒントにして言語の普遍性を謳った生成文法は、誕生から60年近くを経た今になっても、言語学の中心的理論になっている。だが、チョムスキーが提示した理論をそのまま鵜呑みにし、仮説を事実と混同して様々な研究や考察がされていることには、あまり注意が払われていない。その証拠として、言語能力の自律性の問題を取り上げてみよう（神尾（2001：48-56）は、生成文法を批判的に分かりやすく検討した論考であり、言語能力の自律性に対する疑問も扱っている）。

言語能力の自律性とは、言語能力が言語以外の認知機構から切り離されて区別され、ヒトに特有の（言語）能力が自律的に単独で機能するという考え方のことである。だが、果たして言語に関して何を証明したら言語能力の自律性が立証されるのか、不明のまま残されている。チョムスキーはあくまで仮説として言語能力の自律性を提唱しただけであり、これが事実であるという保証はどこにもないし、また、立証の方法も提示していない。にも関わらず、この仮説を言わば「既成の事実」と混同し、研究されている言語理論が一部で散見される。

言語能力の自律性を証明する上で、しばしば登場するのは言語には階層構造が存在するというテーゼである。階層構造とは、例えば John ate an apple. という文において、まず ate an apple という結びつきが動詞句を形成し、次に主語 John と結びついて文が完成されるという、言語の個々の要素の結びつきの強弱ないしは優先順位のことである。英語に限らず、例えば（初期の段階では非階層構造を持つと言われた）日本語の「太郎は走る。」という文におい

でも、まず「太郎は」という後置詞句が作られ、次に「走る」という動詞と結びついて文が形成されるという点で、やはり階層構造が見られる。

だが、言語に限らず、非言語活動の至るところでこうした階層構造を観察することができる。例えば、論理学で「 p ならば q かつ r 」という論理式は、「 p ならば、 q かつ r 」という解釈と、「 p ならば q 、そしてそれ全体が成り立つならば r 」という解釈の2通りがある。両者のいずれの解釈を取るとしても、前者では $[p [q r]]$ 、後者では $[[p q] r]$ という階層構造が存在する。また、子供の遊びにも、「最初にブランコをして、次に滑り台と砂場で遊ぶ」という行動と、「最初にブランコと滑り台をして、次に砂場で遊ぶ」という行動では、やはり別個の階層構造が確認できる。こうした非言語活動においても階層構造が見られるということは、言語以外の他の認知活動に対しても階層構造を認めることができるのと同様であり、言語が階層構造を持っているからといって、ただちにそれが自律的であるという証左にはならない。

言語の階層構造の存在が言語能力の自律性を支える柱にはならないにもかかわらず、生成文法主義的な考え方が深く浸透している理由として、その理論があまりにも魅力的な目標を掲げていることが挙げられよう。チョムスキーの極小プログラム (Minimalist Program) における最新の研究 (Chomsky (1995) 他を参照) では、それまで提唱されていた X バー理論 (X bar theory) が棄却されているが、それでも言語の階層構造や言語能力の自律性を否定しているわけではない。生成文法の主な主張は、今日でもほとんど変更されている箇所がなく、チョムスキーが1965年に著した『文法理論の諸相』(*Aspects of the Theory of Syntax*) の第1章は、チョムスキー自身が「書き直すことはないと思う」とまで述べているほどである。

生成文法は、様々な理論の変更があったが、常に研究の根幹として言語の普遍性を模索していくという、言語類型論 (typology) にも通じる基本的精神を持っている。即ち、全ての言語には何らかの形で共通項があり、生成文法学者はその共通項、つまり普遍文法を発見し定式化していくことに従事している。

このテーゼは、もし現実に解明されれば言語学そのものの存在意義さえも問わねばならないほど魅力的で大きく、そして決定的なものである。勿論、現段階でこのテーゼが完全に確立されたというわけではなく、あくまでその方向性をもって研究が進められているというに過ぎない。だが、近年では、全く別個の、通時的にも共時的にもかけ離れた言語から驚くべき量と質の共通点が見出され、普遍文法を支える1つの論拠ともなっている（具体的には、モホーク語と英語との関連が挙げられる。Baker (1988), Baker (2000) 他を参照）。

チョムスキーの唱える普遍文法は、ヒトがまだ新人類であった時期に交流を通して確立されたものに過ぎないとの極論もある（田近 (2001:239) 他を参照）。普遍文法の根幹は、ヒトが内在的に持つ脳内の文法は全て原理によって定まっており、個別文法の多様性はパラメーターが決定するだけという非常に「内容の乏しい」ものであるとする（Chomsky (1981) 他を参照）。だが、チョムスキー自身が自らの理論に幾多の修正を加えていることから分かるように、この説にはいくつか疑問もある。まず考えられるのが、変数として設定されたパラメーターがあまりにもご都合主義的に理論展開され、言語事実を歪曲して生成文法の枠組みに押し込めている箇所があることである（主な反論は Jackendoff (1997) 他が詳しい）。

この反論は、チョムスキーが言語理論を展開させる時に用いる「理想的な話し手」(idealized speaker) を前提としていることに起因している。即ち、果たして言語活動に「理想的な話し手」(即ち、一切のコンテキストなく、完全に文法的な文のみを生成することができる話し手) を想定することができるかという運用の問題が生じる。生成文法は周到にも内的言語 (internalized language) と外的言語 (externalized language) を区別し、内的言語を研究することによってこの問題に解答を与えようとするが、観察不可能な内的言語を、観察可能な外的言語からどのように研究するのかという新たな疑問が生じる。

生成文法が主張する内的言語はヒトの脳の内部に存在し、精神 (mind) の

一部に「内在化」されたものであり、核文法と同じくこれを研究対象としている。しかし、言語を研究するに際して表層に顕在化された言語を検証の対象としないのは何故なのか、という根本的な疑問もあり、また、ブラックボックスのように扱われている言語機能の解明に、表現された言語を検証しないで解決できるのかどうかという疑念も沸き起こる。

また、言語現象を可能な限り生成文法理論に当てはめていく過程にも無理が生じている。生成文法理論では、ある種の理想主義を持って言語現象と対峙している訳だが（言語を核と周辺に分けて核のみを研究対象としていることもまさにこの表れであろう）、ではその周辺はどのように処理されているかといえ、それこそ「暗黙の了解」のもとに無視されているか、あるいは「例外的現象」としておざなりに説明が付け加えられているという程度に過ぎない（比喩（metaphor）などはその最たるものである）。

つまり、生成文法理論に合致しない周辺の言語事実はまともに取り上げられず周辺の地位に追いやられ、本格的な観察や研究が放棄されてきたと言っても過言ではない。勿論、「例外的格付与現象」などに見られるように、全ての周辺の言語現象が粗雑な扱いを受けているわけではないが、ある前提に対する中心的な言語現象に対して周辺のと見なされ分析されているものがある一方、その前提にも全く関与しえない「周辺の言語現象」は前述のような雑多な扱いを受けているということである。

従って、生成文法が「理想的な話し手」や「理想的な言語体系」を標榜している以上、この世には実際に存在しない、架空の言語を扱っていると批判されるのもあながちうがった見方ではない。近年発達してきた認知言語学が、一見「何でもあり」の感が拭えないのは、今まで等閑視されてきた周辺の言語現象にも恐れずに目を向けた、必然の結果であるとも考えられる。

生成文法が更に主張するテーゼの1つに言語の「規則に支配された創造性」がある。このテーゼは、畢竟「言語は無限に生成されていく」という言語内のシステムにまで拡張される。例えば、He is nice.という文から、その文の先頭にI think を置くことで、I think he is nice.という文を生成することができ

る。更にこの文に Mary thinks という文を先頭に置くと、Mary thinks I think he is nice. という文が生成される。こうした変形操作を循環的 (cyclic) に適用することによって、文は無限に生成することができる、と主張するのが生成文法の立場である。

だが、ヒトという生命体は有限の命しか持たず、人類の歴史も有限である以上、行われる発話も、歴史的に発せられた文の総数も有限のはずである。生成文法が証明したかったのは、原理的に、ヒトは今まで一度も聞いたことがない全く新しい文を理解し話すことができるという、厳然たる、そしてその本質を解明することが甚だ困難な言語使用の創造性 (creativity of language use) であり、あくまで「説明のための説明」である。生成文法が主張したいのは、生成される文は「理論上は」無限であるということだけであり、生成文法に反旗を翻す言語学者がしばしば行う、「生成文法は現実に存在し得ない言語を研究対象としている」という批判は正鵠を得ていると思われる (だが、それと同時に生成文法はしばしば「自然科学としての言語学」を標榜するという内的矛盾を犯しているようにも思われる)。

3.2 言語の習得に関する疑問

更に、言語習得に関する視点においても、生成文法と、それと対立する認知言語学の間では明確な乖離が見られる。言語習得の問題は、チョムスキーが「言語学が答えなければならない疑問の1つ」に数え上げているぐらいだが (Chomsky (1986) 他を参照)、先の原理とパラメーターの体系と合わせて、その理論展開には経験主義的な要素をあまりに軽視している傾向が見られると共に、その生得性にも予め答えを用意しているような節が見受けられる。

ヒトという生物種は、言語が話せない状態から、通常の発達を遂げた上で、なおかつ器質的、機能的に異常がなければ、外界からの貧弱な言語刺激によって、その言語刺激に見合った言語を習得することができる。この言語獲得のプロセスに対し、生成文法は以下のような回答を用意している。

正常なヒトの脳内には言語獲得装置 (Language Acquisition Device: LAD)

と呼ばれる生得的機構があり、この中に原理としての文法が収められている。そして、環境の変化、即ち経験によってパラメーターが変化し、習得される言語が決定される。従って、言語は学習のみによって得られたものではなく、あくまで生得的な機構を媒介にして、経験の助けを経て得られるものであるから、言語の知識は生得的である。そして、言語の知識を生得的に備えているはずの個体が、パラメーターという経験から得られる情報を活用したとしても、臨界期を過ぎると言語の使用が不可能になるのは、個体における言語の発現は習得ではなく成熟の結果であり、この成熟期間を過ぎると（臨界期を過ぎると）言語の母語としての獲得が困難になる、というものである。しかし、その一方、LAD が正常に作動するためには、個体の言語環境において非音声的な手段も含めた母子相互作用によるお互いのやり取りを通しての経験、即ちブルーナーのいう「言語獲得支持システム」(Language Acquisition Support System: LASS)の支えが必要となる、とも示唆されている (Bruner (1996) 他を参照)。

従って、生成文法理論は、突き詰めていけば言語能力は生得的なものであり、学習は不可能であると主張していることになる。だが、臨界期を越えたはずのヒトが、外界からの経験的刺激で（少なくとも限られた範囲で）言語を獲得する能力があるのは事実である。例えば、外国語習得で外国語を学ぶ学生や、バイリンガルと呼ばれる人々、そして、後天的言語刺激を意図的・非意図的を問わず剥奪された、いわゆる野生児である。特に後者は言語の後天的刺激が言語獲得に重要な役割を果たしていることの証左となっている。有名なのが、13歳7ヶ月までクローゼットに閉じ込められ、社会的・文化的・母性的・言語的養育を剥奪されたジェニーの症例である。このケースは、言わば倫理的に決して許されるべきでない「言語剥奪実験」として、後天的言語刺激なしでヒトが発達した際に言語を習得することができるかどうかを検討するにふさわしいデータを図らずも提供することになった。結果、後の学習の成果によって、ある程度までジェニーは言語を習得したが、しかしそれは私たちが「言語知識」と呼ぶのには不完全のものであった。

ジェニーの言語習得は、色々な言語情報を私たちに提供してくれる。まず、プラトンの問題 (Plato's problem) と呼ばれる、「刺激の欠乏」(the poverty of stimulus) が、言語獲得の障壁となっていること、そして、多かれ少なかれ、臨界期を過ぎるまでは言語習得は生得的な側面を持っているということである。

3.3 文法性の判断

生成文法の更なる疑問点に、いわゆる文法性の問題がある。文法性とは、ある文が文法的に正しいかどうかをジャッジする、言わば言語のリトマス試験紙のような役割を果たしているが、この文法性を巡っては、先の「理想的な言語の話し手」と同様、様々な論議を巻き起こしている。生成文法のみならず、大多数の言語研究はある与えられた文が「文法的か」否かによって議論を展開している。「文法的な」文は、ネイティブの直感によるものから、ある(個別)文法に照らし合わせた結果、その文法規則に合致するかどうかなどによって判定される。例えば、以下の文を参照。

- (1) a. This elephant loves eggplant.
b.*Loves elephant eggplant this.

(1a) の文法性と (1b) の非文法性は、以下の組み合わせによっても確かめられる。

- (2) a. Thelma often meets her university friends.
b.*Thelma meets often her university friends.

(1b) と (2b) の非文法性は、語順が間違っているという統語的な文法的制約に違反することから来ているが、レベルが多少異なる。(1b) においては、文が完全に破綻しており、前後関係を予測することは不可能であるが、(2b) においては、非文とみなされたとしても、少なくとも話し手の意図を汲み取

ることはできる。

また、(1)及び(2)の文法性とは別に、(3)も意味的に容認不可能と判断される。

(3) #This eggplant loves elephants.

当然のことながら、生成文法は、(1)及び(2)の文法性と、(3)の容認（不）可能性を区別して論じている。つまり、統語的な文法性と、意味的な容認可能性は峻別すべきだという意見である（この意見については、生成文法と対立する認知言語学も認めている）。この区別については、チョムスキーの以下の例が有名である。

(4) a. *Furiously sleep ideas green colorless.

b. #Colorless green ideas sleep furiously.

Chomsky (1965: 144)

(4)はともに「無意味」であるが（この「無意味」の意味は後述）、英語話者は(4a)を非文法的であると見なすのに対し、(4b)を容認不可能ではあるが文法的であると見なす。(4b)は英語の（個別）文法規則（統語形式）を忠実に守っているので、文法的との判断を下さざるを得ないのである。チョムスキーはこの問題に関して文法性と適格性の区別を認めているが、基本的には(4b)の不適格性をとりあえず脇に置いた「文法性」を議論の対象としている。これは、統語的文法性と意味的（語用論的）文法性の違いと換言することもできよう。

もう1つ、統語的に容認できない文が生成される現象に中間言語がある。中間言語とは、第二言語習得時にしばしば見られる、学習者が統語的に間違った文を生成してしまう状態を指す。中間言語は1972年にラリー・セリンカーによって提唱された概念で、ある目標言語を習得する際に、その学習者がど

の母語を話していようと、共通して同じような間違いを犯してしまう現象である。

- (5) a. *She teached me English.
b. She taught me English.

(5a)は第二言語として英語を獲得しようとしている学習者が、「過去を表す際には-edを動詞に後続させる」という規則を過剰に適用（過剰生成）させてしまった結果、生まれた文である。だが、指導者がその間違いを指摘すると、彼（彼女）は「文法的に」正しい(5b)を発話することができる。

以上の議論から、文法性には3種類（2種類プラス α ）があることが明らかになった。即ち、統語的文法性、意味的文法性（語用論的文法性）そして中間言語（これは統語的文法性ないしは意味的文法性に包含されうる）である。それぞれに考察を加える前に、まず「文法とは何か」という根本的な問題に立ち返る必要がある。

4. 文法とは何か

4.1 文法の成立過程

どの言語にも文法が存在するということは、言語学を学んだことがなくとも誰でも知っている、歴然たる事実と思われている。例えば私たちが全く新しい、未知の言語を学ぼうとする際にその言語の文法規則が網羅されている書物（いわゆる文法書）があれば、その習得は容易なものになるであろう。だが、果たしてその「文法」の正体は何なのか、という問題には、あまり立ち入って考えることはない。言語学では広義の文法（ヒトはどのようにして言葉を話すのかという文法）と狭義の文法（個別の言語が持つ規則としての文法）があるとする見方が一般的であるが（西村他（2013）他を参照）、後者の「文法」が成立した背景には、主に2つの社会的・歴史的要因がある。

ギリシャ語・ラテン語を除いた「俗語」の文法を初めて著した書物は、アントニオ・デ・ネブリハ（Antonio de Nebrija）の『カスティーリャ語文法』（*Gramática de la lengua castellana*）である。ネブリハはこの文法書をイサベル女王に捧げたが、おりしもこの時（1492年）は、コロンブスがアメリカ大陸との接触を果たし、新世界と旧世界の出会いを実現させた年でもある。それは同時に、スペイン（カスティーリャ王国）が新世界に進出して、侵略するきっかけともなった。

『カスティーリャ語文法』の序文にもあるように、ネブリハがイサベル女王に文法書を献本した真の目的は、言語学的なカスティーリャ語（スペイン語）の現象の解明といった学術的な事柄ではなく、被征服者が征服者たるスペイン人の命令に完全に従うことができるように、意思の疎通を図る必要があったことに他ならない。即ち、スペイン語を被征服者たちに理解させるために「文法」が必要不可欠であった。つまり、「文法」とは、征服者が被征服者に忠誠を強いるために国家政策としてなくてはならないものだったのである。つまり、母語の文法（これはとりもなおさず、母語話者には必要ないと思われる）は言葉そのもののために要求されたものではなく、国家とその付属機関である教育機関に要請されたものである。

もう1つの決定的な要因は、現代とは異なる中世から近代に至るまでの文盲率の問題である。文字を用いて書く作業や文字を読解する営みは必ず特別の訓練を必要とする。読み書きは、学ばなくても自然に言葉を話し、聞いて理解することができる能力とは別物である。そして、文法の出発点が、「文字を用いて書く言葉」の習得にあることを考慮に入れるならば、文法とはそもそもある人間（往々にして時間と財力に余裕のある貴族階級）が恣意的かつ人工的に作り出したものであり、原理的に「自然な」ものではない。これは「文法」という語彙が「文字の技術」という語源にあることから推測される。現在でも、フランスではアカデミー・フランセーズが、スペインではスペイン王立アカデミーが、それぞれフランス語とスペイン語を「監視」し、正しいフランス語（スペイン語）を規定するという、政治が言語に介入して

いる姿勢が見て取れる。つまり、「文法」とは、私たちの日常言語、あるいは自然言語の外にある存在なのである。

こうして恣意的かつ人工的に作り出された「文法」に則った言語は、現代のエスペラント語がそうであるように、誰にとっても母語ではないため、習得し使いこなすにあたっては特殊な教育や訓練が必要とされる。そのための膨大な時間を持つことができたのは、当時の社会では最上層の、征服者や支配者階級に属する人たちだけであった。彼らが文法を習得する目的は、支配者としてのイデオロギーを確固たるものにすることであり、そのために文法は被支配者である庶民が簡単に習得できないように、できるだけ難解で複雑であれば、それだけ都合が良かった。中世では、文盲であることは即ち被征服者という烙印を押され、文法を所有することができたのは支配者であるという歴史的背景があったのである。

この歴史的背景に真っ向から立ち向かったのがダンテによる「俗語による文学」である。被征服者の象徴である「俗語」で、支配者階級の象徴である「文法」を用いて文学作品を著すという試みは、当時の社会からは冷遇されていた。もともと、ヒトは「自然言語」である俗語を最初に習得し、習得された俗語を基盤として支配者階級による「文法」が成立していたのに、俗語が文法よりも遥かに下等なものと見なされ、逆に文法は神聖視されていたのである。「文法」を習得しているか否かはやがて支配者階級と被支配者階級の区別という大枠に留まるのみならず、エリートと非エリートを峻別する際にも用いられるようになり、文法的な発話や筆記ができない者は非エリートとされ、軽蔑され、疎んじられるようになる。

ある言語を話す際に、それが社会的に規定された「文法」に則っているかという基準は、現在でも生き続けている。アメリカ合衆国という政府機関は、いわゆる「黒人英語」を下等な言語体系と見なし、教育機関で「標準英語」、即ち黒人にとっては母語ではない言語を強要する。そして黒人英語話者は強要された言語を媒体として他の科目を学ぶことを余儀なくされる。今日の教育事情では、黒人英語話者が標準英語話者に比べて学力の程度が低いとされ

ているが、黒人英語話者は言わば外国語で授業を受けているのと全く同じ状況に置かれているので、それも当然のことである。黒人英語話者は、まず「標準英語」そのものを習得する労力を強いられ、そして更にその「母語でない言語」である標準英語を使って、様々な教科の教育を受けなければならないのである。

最初の問題に立ち返って「文法」を眺めるならば、征服者と被征服者を区別するために考え出された支配者階級専属の「文法」が、ネブリハによって被支配者階級専属である「俗語」に適用されたという点において、ある種の矛盾が生じる。しかし、俗語が異なる言語や方言の話し手にその使用を強制された瞬間に、この矛盾は一挙に解決されるに至った。もともと自然に産出された「俗語（言語）」に、恣意的に発明された「文法」を適用したのには、必然的な社会的背景が存在したのである。

この点に関して、フリッツ・マウトナーは「文法の誤りというものは、文法が発明される以前は全くなかった」という示唆に富んだ言葉を残している。日本の文豪谷崎潤一郎は「文法的に正確なのが、必ずしも名文ではない。だから、文法には囚われるな」と述べ、また、ガストン・パリスは「パスカル、ラフォンテーヌ、ボスュエ、ヴォルテールに、あれほど素晴らしいフランス語が書けたのは、彼らが文法を勉強する必要がなかったからである」という刺激的な意見を述べている（田中（1981：第3章を参照））。

文法とはもともと貴族階級によって恣意的に作られた「理想上の産物」ないしは「理論的産物」であり、その決まりや法則が自然言語と完全に一致することは、方言などが存在することを鑑みてもあり得ない（勿論、文法書にはそうした例外が記載されていることもある）。生成文法では、聞き手が「内在化された、理想的な言語体系」を持つと仮定しているため、欠陥を多く抱えた自然言語に直接向き合うことはなく、理論上に存在する架空の言語と相対しているに過ぎない。従って、文法とは何か、文法性と何か、という問題提起自体、机上の空論に終わってしまう可能性がある。

しかし、ある言語論を語る際に文法性の有無だけを論じることは無益であ

る。我々は、言語を研究する際に、矛盾を孕んだ自然言語を理想的体系である文法に当てはめていくという、ある種の達観した姿勢が要求される。そしてまた、ネブリハの「俗語の文法」の目的がそうであるように、文法はある言語を教授し、理解させるための媒体であるとするならば、その存在意義は決して無視できるものではない。従って、文法の成立過程を念頭に置いた上で、その存在意義を認め、研究していくことが現代の言語理論には必要不可欠である。

4.2 統語的文法性

統語的文法性とは、(1b)や(2b)のような非文法性が統語構造に起因する場合を指す。また、日本語でも、「太郎は死んだ。」は容認されるが、「*は太郎死んだ。」は、日本語母語話者には直感的に明らかにおかしいと認識できる。「直感的」とは、数ある言語理論や文法を参照して結果的に到達した結論ではなく、母語話者ならそういった言語学的素養がなくとも、「明らかにおかしい」と、ある文の容認可能性を判定できるということである。だが、以下のような場合は判断に揺れが生じる。

(6) It ain't nobody I can trust.

(6)はいわゆる「黒人英語」で、現代英文法では間違い（即ち非文）であると判定されるが、黒人英語話者にとってはそうではない（但し、英語とはまた別の言語、あるいは方言を話しているという感覚は往々にしてありうる）。つまり、(6)の文法性を判断する際に、ある見方では非文法的と判断されるのに対し、別の見方では文法的と解釈されるのである。また、日本語の以下のような例も判断が揺れる可能性がある。

(7) a. 太郎，死んだ。

b. *太郎死んだ。

(7a)は「太郎」が主題化されているので容認される可能性が高くなるが、(7a)とほぼ同じ統語構造（読点があるかないかの差異）を持つ(7b)は助詞「は」（ないしは「が」）がないため非文と解釈される。しかし、実際の発話では、(7a)と(7b)の境界線は甚だ曖昧であり、例えば(7a)の発話者が早口であつたり、口語的な状況であつたりした場合には、(7a)は(7b)に変換されても非文とはならない。つまり、(7b)は状況によって文法的な文とも非文とも解釈されるのである。同様の例として、以下を参照。

- (8) a. たばこ、吸いますか。
 b. たばこを吸いますか。
 c. たばこは吸いますか。
 d. *たばこ吸いますか。

(9) 御歓談中失礼します。お客様はお煙草お吸いでしょうか。

江國香織著。『号泣する準備はできていた』p.65. 新潮文庫。

(8a)の文は「たばこ」が主題化されているために文法的な文と解釈される。(8b)は最もデフォルトな「他動詞＋名詞」の構造を持ち、他動詞の動作（吸う）の受動者として「たばこ」が「を」格をとって「たばこを」と具現化されている。(8c)は(8a)と似ているが、対比の「は」が出現しているため、(他の人、ないしは他の銘柄はどうか知らないが)「(あなたは) たばこは吸いますか」という解釈を取る。

ここまでは対比(8c)や主題化(8a)という操作こそあるものの、基本的に(8b)と真理値は変わらない。そして、「は」や「を」という要素を持たず、かつ「たばこ」が主題化されていない(8d)は非文と解釈される。しかし、(9)のように、「お煙草」という名詞と「お吸い」という動詞の間に、如何なる要素も介在せずに出現することがあり、直ちに(9)や(8d)を非文と判断するわけにはいかない。

生成文法理論では文法的な文と非文法的な文を文法という機構が峻別し、

文法的な文だけを生成するという前提をとっているため、その区別は基本的に絶対的である。チョムスキーは(4)の対立によって、意味的文法性と統語的文法性の違いを指摘し、専ら統語的文法性を背景において言語研究を進めてきた。即ち、生成文法理論においては、「統語的文法性の判断」が全ての文に対して可能であるとの前提に立っている。

勿論、チョムスキーは文法性が曖昧な文の存在を認めてはいるが、その成否は文法に照らし合わせてみれば、自ずと判断できると考えていた。そして、「文法的な文」の集合を仔細に検討していけば、ある文が文法的であるか否かという判断基準は人間の脳内に内在する何らかの計算機構 (computational system) によって成し遂げられるとされている。「言語 L の文法とは、L の全ての文法的列を生成し、非文法的列を1つも生成することがない装置」(Chomsky (1957: Chapter 2)) だからである。

しかし、(6)、(7)及び(8)の例文からも分かるように、社会的に(6)、あるいは文脈や超分節要素 (suprasegmental) の影響により、ある言語 L の文法的な文は容易に非文にもなりうるし、またその逆に非文とされる文も文法的な文になりうる。生成文法では、専ら「文法的な文」と「非文法的な文」を比較検討することによって成果を挙げてきているが、これは、とりもなおさず、文法的な文がどんなものであるかが前提として明確でなければならない。だが、「文法的な文」の定義が完全に決定されず、また、文法的な文を確実に保証する言語がどこにも存在しないことから、前提条件自体が議論の対象になってしまう。従って、統語構造からも「ある文が文法的かそうでないか」の判断基準は曖昧なままで放置されることになる。

4.3 意味的文法性 (語用論的文法性)

意味的文法性 (語用論的文法性) とは、統語的には非文とは見なされないが、「ある状況下ではこうした発話はおかしい」(語用論的非文)、あるいは「発話に意味が伴っていない」(意味的非文)といった要素をチェックするための指針である。語用論的非文とは、例えば以下のような文のやり取りである。

(10) A：今日は何を食べましたか。

B：明日は雨が降るでしょう。

(10A)の疑問文に対し、(10B)の応答はコミュニケーション上の観点から全く意味を成さない。しかし、各文は統語的にも、意味的にも何らの非文要素は見出されない。こうした文は談話的 (discourse) にも語用論的にも明らかにおかしい (と常識で判断される)。

さて、(4b)を意味的非文、(10B)を語用論的非文、と単純に判定できるかどうか、検討するのは無意味ではない。まず、果たして無意味の文 (発話) があるかという根本的問いから論じる。

コミュニケーション上の発話、ないしは詩的な発話は、基本的に何らかの意図をもって発せられるものである (「沈黙」という概念もあるが、本稿では問題にしない。「沈黙」に関しては Tabayashi (2003: 2.3.3) 他を参照)。例えば、ある人がリラックスするためにベッドに横たわり、[a] なり [o] なりの発話 (発声) をしたとする。この場合、音韻的にはリラックスのためという機能を持った/a/ (あるいは/o/) が、音声学的には [o] (ないしは [a]) であったとしても、「リラックスのため」という機能的意味は同じであるから、この場合の [o] は/a/と相補分布をなす異音 (variant) と見なすことができよう。

こうした機能は Jakobson が6要素6機能説を唱えて詳しく述べているが (Jakobson (1962-1968) 他を参照)、先の/a/の発話は話し手の感情を表す表出的機能 (expressive function) であるから、仮に話し手が無意識に行った発話であれ、基本的に何らかの機能的意味を持つ。ある発話が機能を持つということは、コミュニケーションに何らかの貢献をしているという点で、有意義である。ある種の発話をする際に、それがたとえ聞き手には理解不能なものだったとしても、基本的に何がしかの機能 (特に詩的機能が顕著となる) を持つ。つまり、「無意味な発話」は、機能的・原理的に「無意味ではありえない」のである。

しかし、このような前提を受け入れると、言語学的な「意味」を捉えることはできない。従って、言語学的に、ある発話に「意味があるかないか」という概念は、とりあえず「発話者が（意識的であれ無意識的であれ）ある目的をもって発した文が、他者によってどのように理解されうるか」という観点に立って論じなければならない。

意味的非文法性の例として挙げた(3)は、詩的な会話、ナンセンス詩、童話の世界などでは容認されるという意味で、意味的に非文と断じることとはできない。(3)の eggplant が意思を持ち、擬人化されているような文脈では即座に意味を持ち、「他者によって容易に理解されうる」からである。また、詩や散文でも(3)は文の彩 (a figure of speech) として機能する可能性がある。だが、チョムスキーは以下の例を挙げて、こうした文の彩を思わせる文は非文であるとしている。

- (11) a. Sincerity admires John.
b. John is admired by sincerity.
- (12) a. Golf plays John.
b. John is played by golf.
- (13) a. John frightens sincerity.
b. Sincerity is frightened by John.

Chomsky (1957 : 7.5)

チョムスキーは(11)から(13)の例を文法的でないと指摘しているが、ナンセンス詩や童話などでは立派に機能する。例えば、(12)はゴルフが苦手なジョンがゴルフに翻弄されているような状況では容認されるだろう。チョムスキーはこれらの例がなぜ非文なのかに対しては注意を払っておらず、(11)～(13)の文を生成しないような規則をどう作るかの説明に終始している。

また、いわゆる「うなぎ文」(「僕はうなぎだ。」)も、意味的な非文の例として挙げられることがある。狭義の意味論の世界では、「僕はうなぎだ」は

「僕という生命体はうなぎという生命体と同一である」と解釈されるが、レストランでの会話などの状況が設定されれば、語用論的にも問題のない文となる。

言語学（ないしは言語論）は全ての言語現象に関心を持つという一般的な姿勢を崩さないとするならば、ある状況ではおかしく、別の状況では適格な文は、それこそ無数にありうる。従って、我々が「一般常識的におかしい」と思っている文でも、その発話が有効であり、かつその発話に適切な状況が存在する以上、言語研究においてその発話を「意味的に非文」として無視するわけにはいかない。

語用論的に非文と見なされる現象についても、生成文法は沈黙したままである。だが、日本のポップミュージックにおける英語（ないしは日本語以外の外国語）の氾濫や化粧品の宣伝、ナンセンス詩、童話の世界では、語用論的に受け付けない文が豊穡に出現する。例えば、日本のあるポップミュージックでは、love, day after tomorrow というフレーズが使われている。歌手や聞き手が、このフレーズを直訳して何らかの意味を汲み取ろうとは、おそらくしない。そうではなくて、音の響きや印象を「聴いて」いるのである。

また、それほど制限された世界でなくとも、詩的効果を狙った語用論的に認められない文は散見される。例えば、シェイクスピアの作品の有名な台詞、to be or not to be, that is a question. を自動翻訳機にかけると、「ここに存在するか、そうでないか、さて問題です。」という訳文を意味として生成する（コンピューターによる自動翻訳の欠点については、Time flies like an arrow. (光陰矢のごとし) などの文にも見出せる。Pinker (1994: 282-283 他を参照))。

要約すると、生成文法の掲げる統語中心主義 (syntactocentrism)、即ち統語部門で生成された文は意味部門で解釈され、音韻部門で表示されるという考え方は、現実の言語運用では大きな問題点を抱えているということである。生成文法は、人間の自然な（文法的な）発話を脳内にある計算システムで解釈しようと試みているが、その前提自体が否定されうる危険を孕んでいる。勿論、生成文法は意味を無視して統語関係のみを研究の射程に入れているわ

けではない。例えば、生成文法は、音素的弁別性 (phonemic distinctness), 文法性 (grammaticality), 統語範疇 (syntactic category), 語などの概念が、同義性 (synonymy), 有意味性 (meaningfulness) などの意味理論の概念を含む原始的諸概念に基づいて、どのように一般的かつ体系的な方法で定義されるのかを中心課題としている (Chomsky (1955: 序論 II) 他を参照)。しかし、それでも言語研究の中心に統語部門を据え、意味と音韻に関しては二次的な扱いをしてきたことは否めない。この点については、ジャッケンドフが生成文法理論を下敷きにしながら、より高次の言語理論を展開している (Jackendoff (1997))。

4.4 ジャッケンドフの三部門並列モデル

ジャッケンドフは、生成文法の理論を基盤としてそれに幾多の修正を加えることで、先に挙げた文法性の判断についてより有益な理論を展開している。ジャッケンドフは、「脳内における心的表示は有限個の表示形式とそれらを結ぶ対応規則からなり、それぞれは独自の原始要素と結合原理からなる体系としてモジュールを形成している」とする表示のモジュール性 (representational modularity) を仮定している。彼は、表示のモジュールによって三部門並列モデル (tripartite parallel model) を提唱するが、この特徴は音韻、統語、意味の三部門に生成能力を認めると同時に自律性も仮定し、それらは語彙 (lexicon) を含んで相互に対応づける規則、即ち「対応規則」 (correspondence rules) によって支えられているとするものである (この主張は中右 (1994) の階層意味論に近い)。

三部門並列モデルによると、先の「リラックスのために発話された/a/」は音韻部門から生成されたものであり、それが統語部門及び意味部門に対応規則で結び付けられ、言語 (運用や発話) としての価値が与えられる。また、ポップミュージックに使われる「無意味な」外国語も、響きを重視するという点で、音韻部門から生成されたものであろう。また、(8d)の統語的非文が(9)のように容認され、話し手に理解されるのは、意味部門から生成された(8

d)が統語部門では拒絶されたとしても（「を」格ないしは「は」格がない場合は統語的に非文である）、音韻、意味の両部門において補完されるからである。

（1b）は、統語的に破綻している文であり、また意味を取ることも非常に困難であるが、少なくとも話し手が「英語を話している」という感覚を聞き手に伝えることは可能である。この意味で、統語部門及び意味部門では拒絶される（1b）は、音韻部門において対応規則を適用されることで、話し手に「意味不明であるが、何らかの英語の発話をした」という意味を与えることになる。「意味不明」と「意味がない」は同義ではなく、前者は「意味は存在しうるが、それが解釈できない」と捉えた方がより自然である。

ジャッケンドフは、生成文法が主張した「全ての文は統語部門で生成されて意味部門で解釈される」という狭いテーゼを捨て、ある程度幅を持たせた見方を採用したと言っても良い。ジャッケンドフはチョムスキーの統語中心主義をsimple compositionと呼び、それと対比させた自説をenriched compositionと呼んだ。この考え方によって、彼は自然言語の諸現象をより広範に救い上げること成功してはいるが、認知言語学（cognitive linguistics）で提唱されている心的走査（mental scanning）の立場を取れば、より簡潔に、そして科学的に解明できる言語現象も三部門並列モデルで処理しようとしている点で、やや柔軟性に欠ける。

5. 認知主義

以上のように、生成文法理論では言語現象の解明に限界があることを見た上で、本節ではそれとは対極にある認知主義という考え方を概観する。認知主義は、広く述べるならば「言語現象の説明原理を主に話し手の心に求める」という点で、チョムスキーの理論と変わるところがない。認知主義というと「反生成文法理論」とのレッテルが貼られることが往々にしてあるが、実は認知主義的言語論の出発点はチョムスキーの考え方によるところが大きい。

5.1 狭義の認知主義

生成文法のアンチテーゼとしての狭義の認知主義における言語論では、言語能力を1つの独立したモジュールと考えるのではなく、複数の認知機構が相互に機能し、そこで初めて言語が産出されるという考え方が前提となっている。認知主義は、「言語の意味はその指示対象のみによって決まるのではなく、認識者がその対象をどのように捉えて、そして認識者の中に取り込んでいくか」という主体化 (subjectification) の過程を重視する (河上 (1996: 195), 辻 (2002: 104) 他を参照)。本来客体であった対象が、言葉として具現化される際に認識者の主体的観点を取り込むことが少なくない。その上で、認知主義は、言語機能は実存する言語活動を通して意味づけられ、決定されていくという考え方をとる。つまり、人間の認知能力に関わる要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチを採用している。

因みに、このアプローチは言語の形式・構造の側面を軽視するものではない。認知主義は、形式や構造による言語的制約も根源的には言語主体の認知能力に関わる制約によって動機付けられているという解釈を取る。認知主義は、言語は思考に影響を与えうるという言語相対説やサピア・ウォーフの仮説に近い立場を取るが、言語が人間の認知機構をはじめとする思考能力を完全に決定するという、いわゆる「強い立場」を取らない。むしろ、あくまで経験主義に基づき、外界からの言語刺激を言語能力における最も高次の要素と位置づける。

認知主義の主張で重要な概念にプロトタイプ理論がある (Rosch (1975) 他を参照)。プロトタイプとは、カテゴリーにおける代表的な成員を指し、カテゴリーはプロトタイプを中心とした内部構造を持ち、プロトタイプを中心として、その周辺に行くに従って、典型例から逸脱していく成員を構成する。

プロトタイプ理論に対して疑問を投げかけ、言語は生得的な性質を持つとした研究が、バーリンとケイ (Berlin & Kay (1969)) による焦点色の主張である。この研究では、基本色彩語の総数は各言語間で異なっていたにもかかわらず、個々の色の中心的存在である焦点色は同一言語の話し手で一致する

ばかりか、異なる言語話者でも高度の一致が見られるという。よって、この研究を支持するならば、人間の思考体系と言語体系は相互の依存関係ではなく、少なくとも思考体系は全てのヒトという種に普遍的な価値を持つという、ユング的観点を採用しなければならない。

言語体系は外的刺激による経験則に依存するというのが認知主義の主張であるため、バーリンとケイの研究は、言わば認知主義に対する強力な反例となりうる。焦点色のある色のプロトタイプと仮定するならば、プロトタイプの普遍性が言語の普遍性と関連があるという仮説が提唱されうる。

5.2 音象徴

言語の普遍性を論じる上でもう1つ大切な概念が音象徴 (sound symbolism) である。心理学的観点からは、この音象徴の発達と進化を支える基盤として、先天説、連合説、そして全ての感覚は共感覚 (synesthesia) から進化したとする進化説の3つが挙げられる。

音象徴はアジア諸言語などに多く見られるオノマトペ (onomatopoeia) などの解釈に大いに貢献している概念であるが、オノマトペではない個々の語にも見られる。例えば、英語の sn-という並びは、snake に代表されるように、「何となくによろよろした感じ」という音象徴を持ち、それによって人々に共通の感覚をもたらし、snake という語が生まれる要件を充足していると考えるのである。また、英語の grudge, grumble, grunt, grouch など gr-で始まる語は「ぶつぶつ不平を言う」や「恨み」などの意味を表すとする。その他、-mp で終わる語は bump, dump, thump, stamp など、何か重いものが落ちる意味を表すことが多い。

この音象徴という考え方は、19世紀の比較文法の時期に既に提唱されていた。フンボルトの後継者を自任していたシュタインタールは、1860年に執筆した論文「音と概念の変化について」(“Über den Wandel der Laute und des Begriffs”) で、英語の stand にみる「立つ」という動作を表す動詞の語根 sta- は印欧語の最も古い形に属すること示唆したうえで、次のように述べている。

この s は運動の観念の反映であり、その音声である。t はその運動の中に立ちあらわれてきたり、あるいは意図的な障害である。もちろん言語の創造者たちは、そのような分析的な意識はもっていない。しかし彼らは sta- の本性についてある意識をもっていたのである。それが内的言語形式として彼らの中に生きていた。これこそ音と意味との間のきずなにはかならない。この内的言語形式は彼らの中に生きていたに違いない。なぜなら、これを欠いたら言語は創造されないからである。これは言語の創造を促す力である。

風間 (1978: 110)

音象徴という考え方は、ソシュールが言語の恣意性を提唱した段階でいったんは否定されるのだが、それ以前には比較文法、ひいてはソクラテスの時代にまでその痕跡を見出すことができる。

また、メタファーによる「黄色い声」という表現が、社会的階層が異なっても似たような感覚を日本語話者に与えたり、オノマトペが与える視覚的、聴覚的なイメージが、少なくとも、その母語話者内では共有されうることがある。例えば、日本語話者にとって「ぼけぼけ」というオノマトペは、おそらく聞いたことがない人がほとんどであろう。だが、一度も聞いたことがない「ぼけぼけ」に対しても、日本語話者は「柔らかな」、*「優しい」*、*「おっとりした」* という共通のイメージを抱くはずである。このことは、ソシュール以来提唱されてきた言語の恣意性 (arbitrariness) が、時に減少し、言語の有契性 (motivated) が押し出されることもあることを示唆している。

重要なことは、「何となく」即ち、理屈や経験則によるものではなく、直感的、生得的な何かによって「この音はこうした感覚や意味をもたらす」という普遍性が、ヒトにとって共通の感覚として存在することである。だが、この主張には以下のような反論がある。まず、sn-を含んだ語が全て「ぬるぬるとした」という意味を持ちうるのか、-mp は必ず「重いものが落ちる」という意味を持ちうるのか、という問題である。すぐに分かるように、jump や camp

にはそのような意味はない。つまり、例外が存在するということである。

二点目の反論として、共感的な事象は一見ヒトに普遍的・生得的に存在するように見えるが、ヒトが住んでいる環境や地理的要因は地球上で日常生活を営んでいる分には大差がないから、感覚は似たような発達を遂げ、その結果似たような経験則が生じ、それ故共通の感覚を持つに至った、とする解釈が挙げられる。つまり、実際は後天的な要素が、あたかも生得的な要素として普遍的価値を提供しかねないということである。だが、この反論には更なる反論が可能である。環境学的に、地球上では極寒の地もあれば温暖な地域、熱帯の地域がある。イヌイット語には「雪」を表す総称名詞がないが、それはイヌイットの人々にとって、雪が生活の一部となっているからであろう。更に、社会的階層や貧富の差、国家や民族といった社会的要因も言語を獲得する際に大きな影響を与えうる。従って、言語はその顕著な多様性から完全な生得説が否定されうる（もし言語が完全に生得的であるならば、ヒトは全て同じ言語を話すはずである）一方、音象徴や共感覚に見られるように、外的刺激がある程度まで人間の言語活動に普遍的に影響を与えうるという折衷主義的な主張が正鵠を射ていると思われる。

5.3 心理学的背景

20世紀初頭から今世紀にかけて、言語学者、特に生成文法学者の中に、言語研究における心理学上の問題に専念するものが多数現れた。もともと密接な学問体系であった心理学と言語学は、「心的構造の探求」という共通の目的があったため、この流れは極自然であった。顕著な例がピアジェによる、発達過程における子供の言語獲得の研究や、子供が成長すると共に外的世界を理解するために築き上げる中間世界の探求などであろう。こうした研究は、純粋な理論言語学を研究しているだけでは到底到達し得ない諸理論を産み出すに至った。両学問の相互的関連は、言語学者チョムスキーと心理学者ピアジェの対談という出来事にも象徴されている。

心理学は、現代言語学と同様に古くて新しい学問である。現代心理学が産

声を上げたのは、ヴントが哲学と生理学の両方の性格を兼ね備えた学問と位置づけて、ライプチヒ大学に世界初の心理学実験室を開いた 1879 年のことである（心理学史家 D・シュルツによると、「今日存在するあらゆる学問の中で、心理学はおそらく最も古い」とのことであるが、賛否両論がある）。心理学発展の過程が言語学のそれと酷似していることは注目に値する。言語学史的に見ると、20 世紀初頭にソシュールが現代言語学の礎を築いたが、古くはエジプト、インド、メソポタミア文明の文字法や古代ギリシャ・ローマ時代の弁論術などがその発祥と見ることもできるため、時期的にも心理学の成立と重なるところがある。

そして、1980 年代から、一時期心理学がブームを迎えたことがあった。映画『羊たちの沈黙』やアメリカの連続ドラマ『X ファイル』などの大衆娯楽の影響により、その精神世界の不可思議さが人々の心を捉え、大きな反響を呼んだ。また、心理学はその新しさゆえ、この 100 年の間にマイノリティとも思える様々な専門分野を生み出してきた。当然、重なって研究されている分野も相当数あり、研究者や学生も爆発的に増加した。だが、心理学は、行動心理学を大成させたワトソンのような例外こそあるものの、基本的に人の内観に頼る学問であるため、主観的な側面が多いことも否めない。言語論と心理学は、共に自身の研究や実証、内観による判断などを重視し、客観的な事象を捉えることが難しいという特徴がある（特に言語学では意味論、心理学では精神分析学にその傾向が強い）。そういった意味でも、個別理論が重視される言語学と心理学は共通点がある。

チョムスキーは、①言語学は心理学の次にくるものであり、心理学は生物学の次にくるものである、という、いわば学問に対して優先順位（階層）を主張したことは前述した。それに基づき、②生成文法とは心の探求である、というテーゼを打ち立てたが、これは少々言い過ぎのきらいがあるかと思われる。そもそも、仮に言語獲得、言語運用に関して生得的かつ絶対的な理論が構築され、それが証明されたとしても（そしてそれができるためには恐ろしいまでの時間と研究が必要とされ、あまつさえ言語学の存在意義さえも問

わねばならなくなるであろうが)、直ちに心の探求を成し遂げたことにはならない。所詮、精神活動の側面の1つである言語的側面を明らかにしたに過ぎない。つまり、言語の計算システムを明らかにしたからといって、とても②が主張するような心の探求までは到達し得ないのである。

それに引き換え、①の主張は生成文法の立場を明らかにしているという点で、ある程度的を射ている。言語活動が人間の精神活動に根差している以上、言語学は心理学とは少なくとも密接に関連しているし、そして、生物学が人間のメカニズムを物理的・精神的側面から捉えている限り、心理学は生物学の枠を超えることができない。だが、これは専門性ないしは細密度の問題で、ある研究対象を仔細に研究していった結果、必然的に言語学は生物学に包括される立場にあるというだけであり、決して言語学は心理学や生物学の下に来るものではない(もし包括度が学問の優劣を決定するというのであれば、天文学が至高の学問で、遺伝子工学が最も粗野な学問ということになる)。しかし、ある言語理論を構築する際に、その心理学的背景がどのようなものを考慮しておくことは非常に有効である。例えば、ジャック・ラカンやロラン・バルト、ジュリア・クリステヴァらの言語理論は精神分析学を基盤としている。彼らの言語に対するアプローチは、チョムスキーのそれとは一線を画すが、どちらが優位の言語理論というわけではない。

5.4 精神分析学としての言語学

さて、精神分析的な視野から見た言語理論は、言語を認知主義の立場からアプローチする限り、避けては通れない議論の対象となりうる。認知主義が外界からの経験則を重視し、言語能力及び言語運用は主に後天的な刺激によって習得されうると考えるならば、外界からの要因に対して反応を起こしうるヒトの精神構造や「意識」を仔細に検討することは無意味ではない。

精神分析学はフロイトによって創始された心理療法の技法の1つであり、ヒトの行動の心理学的な洞察及びそれに基づく分析的・力動的理解がその研究の中心となる。また、無意識の存在と、心いくつかのエージェントとト

ポロジー（位相幾何学）を仮定することにより，精神は構造を持つとする構造的仮説を支持して誕生した。

本稿で精神分析学を言語論に関係付けるのには，4つの理由がある。まず，「自由連想法」という精神分析療法の存在である。自由連想法には更に2種類あり，1つは刺激語を与えてそれに対して被験者がどのような過程（プロセス）で連想していくかという方法，もう1つは最初の刺激語から次々に浮かんでくるイメージを被験者に描写させていくという手法である。また，現在でも積極的に行われている文章完成テストなどでも，最初にいくつかの刺激文を与えておいて，それに対する「言語的」文脈の判断から精神分析的なアプローチで心の動きに迫る方法を採用している。

どちらのアプローチにも，「刺激語」（あるいは刺激文）と，それに対してイメージを描写ないしは連想していく際に，必ず言葉が媒介になるという共通点がある。言葉が媒介になっている以上，当然その解釈も一様ではなく，そこに言語論的な分析が必要とされる。精神分析学者が患者の心に迫る時，患者の言葉をフィルターとして通すことになる。患者の意識，もしくは無意識の働きを探求するために，精神分析学者は言葉，特にその構造と法則を検証していく以外に手立てはない。

従って，精神分析学では言葉の端々に出てきたあらゆる兆候を精神活動の現われとして解釈することが必要となる。精神分析学では，話す主体が示した兆候を精神活動の一端として捉え，解体された一種の表意体系と見なす。また，思考と内言語を一致させるという試みも同時に行われていることから，「精神分析学によって明らかにされた思考は内言語である」というテーゼが打ち立てられている。

2番目の理由は，フロイトも1917年の著作 *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* で繰り返し挙げている，「しくじり行為」という現象の存在である（特に第1部）。多湖（1986）は，「しくじり行為」を端的に表す事例を紹介している。ある客人が食事に招かれ，期待していた食事が思ったほどさして美味しくなかった時に，「ご馳走様」という代わりに「お粗末様」と言っ

てしまうことがある、という。これはフロイトの述べる心理的な錯誤行動の一種である。人は誰でも、人に知られたくない悩みや不安を持つと、それを押し隠そうとして自分の内面に閉じ込める。だが、その欲求不満が強いと、単に押さえつけられるだけに留まらず、通常の自分、通常の行動とは異なった行動を無意識にとってしまう。先の例では、豪華な食事に対する期待外れの気持ちが大きくなり、それを悟られまいと押さえつけた心の表れとして、しくじり行為が言語的に噴出したものである。つまり、「思いよぬ間違い」の中にも、かなり「思いよる間違い」が含まれているということになる。

第3に、しくじり行為と因果関係が指摘されている「ど忘れ」という行為がある。ど忘れとしくじり行為との間には、形態的な言語現象において共通点を見出すことができる。フロイトが1901年に発表した『日常生活の精神病理学』(*Zur Psychopathologie des Alltagslebens*)にもその事例が紹介されている。フロイトは、ある日友人とヘルツェゴビナとボスニア(Herzegowina u Bosnien)の話をしていた。その後、その話と関連する「先生」(Herr)とトルコ人の話をしようと思ったが、「トルコ人は性欲が強い」という先入観を持っていたため、その話題を口に出すことを回避した(ここに「抑圧」が見て取れる)。代わりに話した内容は、「Trafoiという町で、患者が自殺した」というものだった。その後、話題はSignorelliという画家の話に移ったが、フロイトはその画家の名前を知っていたけれども思い出せなかった。つまり、「ど忘れ」が生じたのである。代わりに、(間違ったことは知っているが)BotticelliとBoltraffioという2人の画家の名前が浮かんだ。フロイトは、画家の話が出る直前のヘルツェゴビナとボスニアの話題が、彼の思考を間違った方向に誘導したと考えたのである。

以上がフロイトの主張する「ど忘れ」の一例であるが、ここには意識でコントロールしている抑圧(「先生」(Herr)とトルコ人)と意識下の抑圧があり、Trafoiは意識下での抑圧だったというのがフロイトの主張である。

以上を図式化すると、以下のような形態的プロセスを経て、「ど忘れ」が形成されたと考えられる。

Herr → Herzegowina

Trafoi → Boltraffio

Signorelli → Herzegowina → Herr ← 死と性欲 → 抑圧

Botticelli → Bosnien → Boltraffio ← Trafoi → 抑圧

この事例を見ると、表出された、あるいは表出される以前の無意識の言語体系・思考体系にも、かなり言語が影響を与えていると仮定することができよう。

最後に、歴史学とも関連する、心理言語学用語の「似たような語の錯綜」(malapropism)がある。第二次世界大戦にヒトラーが用いた、Blut und Bodenというキャッチフレーズは、ドイツの社会民主党のアウグスト・ウィンニグが作り上げ、リヒャルト・ヴァルター・ダレがナチス・ドイツの台頭と同時期に普及させた。ヒトラーはこのフレーズを掲げ、侵略戦争の正統性を説いた。曰く、「ゲルマン民族は世界で最も優れた民族であり、最も優れた血統を持っている。ゲルマンの血(Blut)を絶やさせてはならない。下等な民族が重要な土地(Boden)を使って繁殖しているのは悪行である。彼らを駆逐して優秀なゲルマン民族の血を広げるのが世界のためである。よって、ナチスの侵略戦争は正義である」。現代政治学から見れば支離滅裂な理屈であるが、当時のドイツ人たちは、BlutのBとBodenのBの韻を踏む、その心地よい響きにすっかり酔ってしまったのである。演説巧みな弁舌者が力強い口調で発すれば、その効果はますます上がる。ヒトラー自身は単なる狂人であったかもしれないが、心理操作が巧みな人種理論家のダレがいなければ、独裁者にはならなかったかもしれない。

太平洋戦争でも、アメリカ合衆国は日本と戦う時にRemember Pearl Harborというキャッチフレーズを用いた。これが何故Remember Hawaiiにならないのか(ハワイの方が真珠湾より遥かにメジャーな地名である)。それは、-berと-borが織り成す韻を踏んだ響きの良さを最大限に利用し、アメリカ国民に

対日感情を浸透させようとする心理的意図があったからである。Remember Hawaii では、「もともとはアメリカもハワイを侵略したではないか」という気になって、アメリカ国民は高揚しないのである。

一番目が意味的解釈、二番目と三番目が統語的及び形態的解釈、四番目が音韻的・音声的解釈によって、言語と精神が関連付けられていることが明白になる。つまり、以上のような例からも明らかなように、精神分析学を語る上では言語論が語られなければならないし、また言語論を語る上でも、精神分析学、ひいては心理学的考察が欠かせない。そうでなければ、精神構造における言語能力の探究が覚束なくなるのである。

5.5 ユングの集合的無意識（普遍的無意識）

精神分析学と言語論は密接な関係にあり、相互に関連付けられた研究がある。だが、言語論で問題にされる精神分析学は、フロイトが主張したそれではないことが多い。フロイトは全ての無意識や行動現象をリビドーと呼ばれる性衝動に置き換えることで説明しようとしたため、やがて破綻が生じ、幾多の優秀な弟子がフロイトの元を離れて独自の精神分析学を構築するに至った。その代表的な一人がユングである。

ユングの残した功績は大きい。民族神話の解釈によって、ナチス・ドイツの民族排外主義を推し進めるといって、国際的に見て異常な現象を引き起こしたという主張もある（小俣（1997）を参照）。だが、学問の発展には軍事の貢献が大きいことも事実であろう（認知心理学などはその顕著な例と言える）。

ユングの功績でしばしば引用される概念に外向性と内向性などがあるが、本稿では無意識に対する立場をフロイトのそれと対比することによって、言語論における精神分析学的枠組みをごく簡単に考察する。

ユングは「意識の中心は自我である」と説き、「意識と無意識を合わせたものの中心を自己（self）」と位置づけている。ここで強調されるべきは、フロイトとは対照的な集合的無意識である。無意識を重視し、それが意識化され

る時にシンボルの形をとると想定したのはフロイトと同じであるが、フロイトが単に個人に対する無意識を論じ、全てをリビドーによって説明付けたのに対し、ユングは無意識のうちに我々の子孫の遺産である古態型の集合的無意識があることを主張した。そして、自己が自我に具現化される際に「元型的イメージ」(archetype)が集合的無意識の結晶として生じてくるという理論を提示した。

世界の神話や昔話、チェスや将棋などといった盤上ゲームや曼荼羅の世界観、悪魔の書『ミトラ』などでは、その発祥地が全く異なった、隔絶された地域においても驚くべき類似性を示す。この類似性に説明をつけるには、精神が階層構造を持ち、そして、その最も表面に現れ得ない底辺において人類に共通の普遍的な無意識が想定されていると考えざるを得ないであろう。つまり、チョムスキーの生成文法や言語類型論における言語の普遍性は、この集合的無意識が元型的イメージに「言語」という枠組みを置くことによって集合的無意識として生じたものだという解釈もできよう。しかし、その普遍性は非常に微小なものである。何故なら、外界の刺激を無視しては言語使用はおろか、我々が通常目に見えないとされる言語能力の習得や精神的成熟（これはとりまおさず、普遍的無意識を構築する）さえも不可能だからである。

6. 結語

以上、認知主義の妥当性及び言語の生得性の問題を中心に論じた。即ち、言語能力は完全に独立し自律したモジュールを持つ生得的なものではなく、幾つかの複合的認知機構が集まって相互に干渉し合い、経験的な要素を通じて言語運用を可能にしているという立場が、基本的には言語に対する正しいアプローチであると思われる。そして、言語の持つ普遍性の一部を認めるが、それは生成文法理論のそれがそうであるように言語モジュールによる原理を仮定するという単独で存在するものではなく、ロッシュによるプロトタイプ、音象徴と共感覚、そしてユングの集合的無意識の3つが相互に関与している

と考える。だが、それは、個々の項で説明した通り、言語能力の本当に僅かな側面だけを保証しているに過ぎず、生成文法理論の特に統率・束縛理論（GB理論）ように「個別文法は内容の乏しいものであり、外的刺激も変数のみに影響を与えるだけ」という考え方ではない。そうではなく、言語の運用はレイコフの主張する、客観主義とも対比させた、多くの認知言語学者に共通する経験基盤主義（experimentalism）を基盤としていると見て差し支えないであろう（Lakoff（1987）他を参照）。

以上の議論をまとめると、以下ようになる。

- ①プロトタイプ理論＋音象徴（共感覚）＋集合的無意識＝言語の生得的側面
（但し、個々の要素は限りなく小さい）
- ②言語の生得的側面＋経験要素＝言語能力
（認知主義の仮定する複数の認知機構の相互作用による言語能力）
- ③言語能力＋文脈＋語用論的側面＝言語の表出

①は言語の生得的側面であり、それに経験要素が加わって、言語能力を構築する（②）。その言語能力は文脈と語用論的側面を持って初めて、「言語の表出」として具現化される（③）。従って、内的言語を検討することは、生のデータである言語の表出から推測することしかできず、原理的に内的言語のみを検討の対象とすることは不可能である。

本稿では、折衷主義ではあるが、言語能力には普遍的かつ生得的側面と、経験主義的かつ帰納的側面の両者が相互に絡み合って発生していると考えるのが、実際の言語論を語る上では正鵠を射ているとする立場を表明する。生成文法はその魅力的なテーゼのために、数多くの研究者を輩出してきたが、あまりに「言い過ぎ」のきらいがある。それを理論的・経験的に補うのが、認知主義に根差した言語論であろう。言語論を語る際には、どちらの立場を踏襲するにせよ、そのアプローチを明確にしておかなければ、その理論は牽強附会との評価を得てしまう可能性がある。

参考文献

- Baker, M.C. (1988) *Incorporation. A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press.
- Baker, M.C. (2000) "Syntax." In *The Handbook of Linguistics*. (eds.,) Aronoff, M. and Rees-Miller, J. Chapter 11. Blackwell. 265-294.
- Berlin, B. & Kay, P. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press.
- Bruner, J. (1996) *The Culture of Education*. Harvard University Press.
- Chomsky, N. (1955) *The Logical Structure of Linguistic Theory*. Published in part in 1975. Plenum. A paperback edition with an index published in 1985. University of Chicago Press.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. Mouton.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1980) *Rules and Representations*. Columbia University Press.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, N. (1982) *The Generative Enterprise*. Foris.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Prager.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- 福岡伸一 (2012) 『せいめいのはなし』新潮社.
- Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*. MIT Press.
- Jakobson, R. (1962-1968) *Selected Writings*. 8 vols. Mouton.
- 神尾昭雄 (2001) 「生成文法への三つの疑問」月間言語. 2月号. 48-56. 大修館書店.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社.
- 風間喜代三 (1978) 『言語学の誕生 一比較言語学小史一』岩波新書.
- 木村敏 (1982) 『時間と自己』中公新書.
- 小俣和一郎 (1997) 『精神医学とナチズム 一裁かれるユング、ハイデガー』講談社現代新書.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- 松本裕治・今井邦彦・田窪行則・橋田浩一・郡司隆男 (1997) 『言語の科学入門』岩波講座 言語の科学 1. 岩波書店.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』中公新書.
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. Harper Perennial Modern Classics; 1 Reprint edition.
- Rosch, E. (1975) "Cognitive Representations of Semantic Categories." *Journal of Experimental Psychology. General* 104 (3). 192-233.

- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace and Company.
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』 岩波新書.
- Tabayashi, Y. (2003) *Aplicación de la semántica jerárquica y la teoría de prototipo en la preposición EN – Con especial atención a la polaridad de EN*. M. A. Tesis. Universidad de Sofía.
- 立川健二・山田広昭 (1990) 『現代言語論 ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン』 新曜社.
- 多湖輝 (1986) 『不思議なふしぎな人間心理 日常生活でぶつかる不可解な人間行動を徹底解明!』 ごま書房.
- 田近伸和 (2001) 『未来のアトム』 アスキー.
- 田中克彦 (1981) 『ことばと国家』 岩波新書.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.